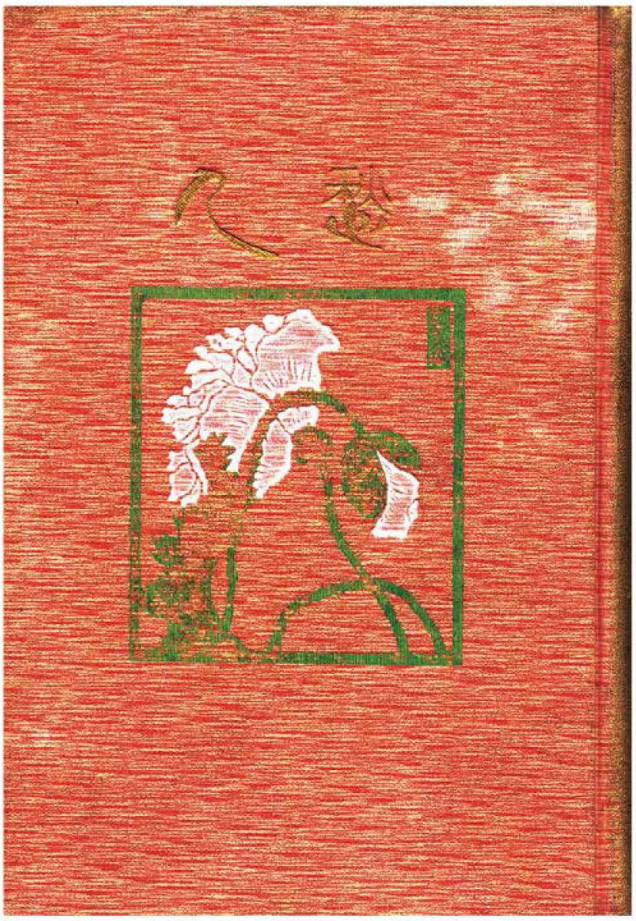
# 第１小説集『愁人』～作られたる人にあらず～

明治 40 年（1907）6 月、未明の最初の小説集『愁人』が、隆文館から刊行されました。未明が満 25 歳の時の出版でした。未明の師・坪内逍遥が序文を書き、竹久夢二が装幀を、中澤弘光が口絵を担当しています。四六判、小説 33 編を収めた全 360 頁の大冊です。同年 12 月に刊行された第２小説集『緑髪』（隆文館）所収の小説 44 編とともに、未明が小説を書き始めた明治 37 年頃からの初期作品が収められています。

『緑髪』巻末には、『愁人』に対する総数 23 紙誌に及ぶ書評が 18 頁にわたって紹介されています。これを読むと、いかに『愁人』が同時代の人々に好意的に迎えられたかが分かります。「都新聞」の書評を以下に紹介します。



> 「愁人」一篇は近時の文壇を通じての傑作であつて此の作家は近時異数の天才である（中略）（天才と云ふ語は滅多に用ゆ可き語でないが此の作家に対しては此の語を許してよいと思ふ）

また坪内逍遥は、「序文」において、未明のことを「作られたる人にあらずして生れたる人」と述べ、「読書の人にも記誦の人にもあらずして、瞑想の児、憧憬の児」と捉えたうえで、次のように述べています。

> 其作品は、之を文学史的に見れば、アナクロニズムの一束（バンドル）とも見るを得べく、或は国土を異にせる異元素の一塊とも見るを得べし。十九世紀の初めに出でし独のロマンチストなどに類似せる性癖もあれば、ファン、ド、シエークルの青年文士さながらなる特質もあり、期せずして今の所謂ナチュラリズムの流れに通ずる脈もあれば、お伽話めく空想も混ぜざるにあらず。

坪内逍遥が述べているように、自然主義隆盛の文壇にあっては、未明のロマンチシズム的作風は時代錯誤（アナクロニズム）といえる側面をもっていましたが、それはあくまで文学史的に見た場合であって、文学の内容的価値からいえば、日本のこれまでの文壇にない西欧的な文学を独自に切り開いた普遍的な作品として驚きをもって評価されたといえるでしょう。

『愁人』には「面影」「蝶の屍」「老宣教師」など、早稲田大学在学中に影響を受けた故ラフカディオ・ハーンを偲ぶ作品がありますが、ハーン文学がもつ〈憧れ〉〈漂泊〉〈愁い〉を引き継ぐかたちで当時の未明の小説は創られたように思われます。自然の姿と人の身の上を思い比べながら人の命のはかなさを愁える小説や、貧しさからくる人の暮らしのありようを愁える小説が多いのが、『愁人』の特徴です。

上記の引用文からわかるように、『愁人』にはさまざまな文学的要素が含まれています。童話的作品や、子供時代を回想した作品、自然主義的な作品、物質文明を破壊しようとする社会主義的考えを述べた作品など、後の未明文学の展開を予感させる小説が多くあります。しかも未明は〈愁い〉そのものがもつ人生的価値に十分意を注ぎつつ、〈愁い〉から脱がれる希望の方向も示そうとしています。

〒943-0835 新潟県上越市本城町8番30号（高田図書館内）　Tel：025−523−1083　E-Mail：mimei@city.joetsu.lg.jp